

長期間の高温に対する農作物等の技術対策

【普通作】

1 高温の影響

<水稲>

水稲は、出穂後に一定の高温が続くと、「白未熟粒」や「充実不足」の発生による玄米外観品質の低下が懸念される。

病害虫については、高温多湿になると紋枯病の発生が増加するおそれがある。

<大豆>

生育中期に高温が続いて土壌水分が不足すると、節数や分枝数、さや数の減少等が発生する恐れがある。

2 対策

<早期水稲>

- (1) 白未熟粒発生を防止し、籾の充実を高めるため、出穂後 20 日間は水を切らさないように管理する。
- (2) 用水が有効に利用されるよう、ほ場の漏水防止対策に努める。
- (3) 登熟期の水管理は間断かん水を基本とし、早期の落水を避ける。

<普通期水稲>

- (1) 茎数が確保されたら、過剰分げつ抑制や倒伏防止のため、踏めば足型がつく程度の黒乾状態まで中干しする。
- (2) イネが最も水を必要とする穂ばらみ期～出穂開花期を中心に湛水管理を行う。
- (3) 用水が有効に利用されるよう、ほ場の漏水防止対策に努める。
- (4) 登熟期の水管理は間断かん水を基本とし、早期の落水を避ける。
- (5) 葉色が低下した状態で高温が続くと白未熟が発生しやすくなることから、幼穂形成期頃に極端な葉色の低下が見られる場合には、出穂前 10 日頃までに穂肥を施用する。
- (6) 紋枯病やトビイロウンカ、斑点米カメムシ類は、高温により発生が増加するおそれがあるため、適期対策に努める。

<大豆>

- (1) 出芽を確認したら、土壌の過乾燥を防止するため、本暗渠の栓を閉める。ただし、多量の降雨の場合は、栓を開けて排水を行い、再度、栓を閉める。